北大構内の遺跡

昭和57年度

1984

[3]

序

昭和55年にはじまった北大構内の埋蔵文化財調査は，年とともに益々活動の領域をひろげている．そのなかでも，56年夏に開始され，57年初秋に調査が完了した新学生寮敷地の発掘は，予想をはるかに越える大事業であった．本学の基本計画上やむを得ないタイム・リミットがあったのだが，この点を理解された調査プロジェクト・チームのメンバーは，厳寒の時期にも休むことなく発掘を続けられた．その労をねぎらうかの様に，これまでのいかなる調査でも知られていなかった，小川に作られた魚止めの施設が原位置のまま発見されたり，これを使用していた1000年前の人々の村も，そっくり掘りだされた．

調査室の話によると，これらの発見は，当時の生活を復元する上に，きわめて重要なものだという．ここに，その略報を含めた北大構内の埋蔵文化財調査報告書第3号が刊行される運びとなったことは御同慶に堪えない。

北海道大学の構内に，かつて清冽な流れが何本か存在していたことは，学生時代をこのキャンパスで過ごした私の記憶にもある．古く札幌農学校時代には，この小川にサケやマスのそ上がみられたことが，ものの記録に残っているという．本学の歴史は，ある意味でこうした古来からの恵まれた自然環境のなかで育まれてきたのだともいえるだろう．この有形無形の遺産を，今後とも大切にし，より快適な教育・研究活動のための環境をつくりあげて行きたいと思うのである．

困難な作業を遂行している調査室ならびに調査プロジェクトの皆様の活動におおいに期待するものである．

昭和59年3月20日

北海道大学長　有江幹男

目次

序 ―― 3
Summary ―― 5

第Ⅰ章　昭和57年度事業報告 ―― 7
Ⅰ-1　調査及び保存事業の実施 ―― 7
Ⅰ-2　構内遺跡の分布 ―― 8

第Ⅱ章　学生寄宿舎建設地区の調査 ―― 10
Ⅱ-1　調査の概要 ―― 10
Ⅱ-2　調査の結果 ―― 13
(1)遺構 ―― 13
(2)遺物 ―― 19
Ⅱ-3　小括 ―― 21

第Ⅲ章　農学部附属植物園地区の調査 ―― 22
Ⅲ-1　調査の概要 ―― 22
Ⅲ-2　調査の結果 ―― 23
Ⅲ-3　小括 ―― 24

まとめ ―― 25

<図・表目次>

▶学生寄宿舎建設地区関係図版
第１図　北大構内遺跡・遺物採集地点分布図 ―― 9
第２図　発掘区と周辺の図 ―― 11
第３図　地形及び遺構配置図 ―― 12
第４図　１号住居址実測図 ―― 13
第５図　６号住居址実測図 ―― 14
第６図　１号土坑実測図 ―― 15
第７図　堰状遺構(テシ)実測図 ―― 16
▶農学部附属植物園地区関係図版
第８図　発掘区と周辺の図 ―― 22
第９図　グリッド及び遺構配置図 ―― 23
第10図　住居址実測図 ―― 24
▶学生寄宿舎建設地区関係写真図版
第11図　遺跡の近景 ―― 28
第12図　１号住居址 ―― 29
第13図　６号住居址 ―― 30
第14図　１号土坑 ―― 31
第15図　テシ全景 ―― 32
第16図　テシの部分(1) ―― 33
第17図　テシの部分(2) ―― 34
第18図　線刻文字のある土器片 ―― 35
第19図　出土土器と紡錘車 ―― 36
第20図　出土土器と土製支脚 ―― 37
第21図　テシの出土遺物 ―― 38
第22図　出土石器及び玉類 ―― 39
第23図　テシ出土木材の電子顕微鏡写真 ―― 40
第24図　炭化種子 ―― 41
▶農学部附属植物園地区関係写真図版
第25図　発掘状況・住居址・出土遺物 ―― 44

表-1　構内遺物採集地点 ―― 8

Summary

1. In the 1982-1983 school year, intensive excavations were carried out at two localities , one at the new students' dormitory and the other at the greenhouse in the arboretum, while limited, test excavations were undertaken at five other localities on the campus.

2. Places where artifacts have been surface collected are marked in Fig. 2.

3. The intensive investigations at the dormitory site lasted for thirteen months and a half. An area of 5,904 square meters were excavated, and, resultantly, five semi-subterranean houses, six pits, four piles of pebbles and numerous clusters of ash and carbonized objects were discovered. A characteristic fish weir resembling 'tesi' of the Ainu was unearthed at the bottom of an old stream, which had been buried underground near the southern end of the site.

4. Artifacts excavated from the dormitory site include Haji-ware pottery, some made by potters r's wheel, Satsumon pottery, Suye-ware pottery, various clay objects, stone axes and arrowheads, iron objects as well as wooden items such as fishing gears and stakes. Furthermore, carbonated grains of rice and millet were excavated, in addition to the abundant finds of salmon vertebra and teeth.

5. The above-stated materials will be closely examined and described in detail in a separate report, which should be published in the near future.

(Hiroaki OKADA)

第Ⅰ章 昭和57年度事業報告

Ⅰ-1 調査及び保存事業の実施

(1) 昭和57年度に本調査を行った地区は，以下に記す2個所であり，詳細は第Ⅱ・Ⅲ章に示してある．

1 学生寄宿舎建設地区

2 農学部附属植物園施設(温室)建設地区

(2) 昭和57年度に予備調査を行った地区は以下に述べる5個所である．

3 札幌団地基幹環境整備地区(情報処理教育センター西側)

▶予備調査期日／4月20日～4月22日

▶面積／475m²

▶方法・所見／置土・廃土が厚いため重機による掘削を行ない，細部は手掘りを実施した．その結果，第Ⅰ層の黒色土から擦文時代の土器片19点，ハンマー・ストーン1点が出土し，また，調査区域西側（テニスコート寄り）に遺構とおぼしき黒色土の堆積を確認した．しかし，その個所は直接工事にかからないため埋めもどしをして保存処置を施すことにした．

4 福利厚生施設建設地区

▶予備調査期日／8月16日～8月31日

▶面積／528m²

▶方法・所見／置土が厚いため重機による掘削を行ない，旧表土上面から人手による掘り下げ作業を実施した．その結果，黄色粘土層をはさんで下層のピート層まで掘り下げたが，遺構・遺物等は確認されなかった．

5 福利厚生施設建設地区(体育指導センター)

▶予備調査期日／8月19日，8月31日

▶面積／30m²

▶方法・所見／置土・廃土が厚いため重機による掘削を行ない，細部を人手により調査した．その結果，地層状況は表土—黒色土—黄色粘土と比較的正常な堆積を示していた．特に，黒色土の下面より土師器甕の口縁部破片1点が出土し，当地区は擦文時代の遺跡であったことが判明した．

6 経済学部研究棟建設地区

▶予備調査期日／8月19日～8月25日

▶面積／110m²

▶方法・所見／置土・廃土が厚いため重機による掘削を行ない，後に人手による精査を実施した．重機による掘削の段階で当地区は全体の多近くが旧建物の基礎や深掘のためすでに破壊されていることが判明していた．わずかに残存していた旧表土やそれ以下の地層からも遺物・遺構等は確認されず，本調査の必要がないとの判断に至った．

7 医学部付属病院中央診療棟建設地区

▶予備調査期日／9月14日～9月21日

▶面積／1,560m²

▶方法・所見／置土・廃土が厚いため重機による掘削を行ない(7日間を要した)，後に人手による精査を行なった．重機による掘削の段階で，現建物に近接した地区等を含め破壊が著しく進行していたため，人手による精査は地層の残存状態が比較的良好な地

区を選定して行なった．保存されていた地層は，上から順に黒色土―褐色粘土―黄色粘土と堆積していた．遺物は褐色粘土層と黄色粘土層の境界面から続縄文時代の甕底部が1点出土したのみで，他に遺物・遺構は全く出土しなかった．その結果本調査の必要がないとの判断に至った．

(3) 昭和57年度に工事中立会を行なった地区は以下に示す12個所である．

❶札幌団地基幹環境整備地区工事現場／4月20日
❷獣医学部実験研究棟工事現場／4月23日
❸理学部ヘリウム自動液化装置温室工事現場
／4月23日～4月24日
❹札幌団地基幹環境整備地区工事現場
／4月24日～4月25日
❺札幌団地基幹環境整備地区工事現場
／4月26日～4月27日
❻第一号宿舎植栽工事現場／4月27日，5月1日～4日
❼札幌団地基幹環境整備地区工事現場／4月28日
❽札幌団地基幹環境整備地区工事現場／5月7日
❾農学部付属農場(北24条以北)囲障取設工事現場
／10月4日，10月8日
❿学生寄宿舎E棟ケーブル工事現場／10月12日
⓫中央第二号公務員宿舎2号棟舗装工事現場
／10月22日
⓬馬術部系統給水管布設替工事現場
／11月26日～11月28日

以上の工事現場は，舗装道路の積土や置土，あるいは旧建物の基礎工事ですでに破壊が著しいところ（❶～❺，❼，❽，❾，⓫）や，地層の保存状況が比較的良好にもかかわらず工事面積が少ないこと等から遺構・遺物が確認されなかった（❻，❷，⓬，❷）ものである．

（横山英介）

I-2 構内遺跡の分布

昭和57年度は，構内における遺跡の一般分布調査を行なわなかったが，昭和56年度報告書刊行以後の各種の調査により，遺跡・遺物散布地が新たに確認されている．構内遺跡の分布に関する資料として，前報に続いて昭和58年12月末日までに遺物の分布が確認された，すべての地点を第1図及び表-1に示す．構内全域を表示する座標系は，前報と同じである．

新たに確認された地点で主なものとしては，セロンベツ川の上流の演習林苗畑地区(08-36付近)，大学本部前地区(10-03)，薬学部南西地区(28-13他)，ポプラ並木北西地区(25-34付近)，外国人宿舎付近(93-52他)をあげることができる．

第1図を見ると，構内における遺跡の分布は以下のようである．まず，これまでにも遺物の分布が確認されていた地区の内，本部南側より学生部，情報処理教育センター，薬学部南西，応用電気研究所西側に至るサクシュコトニ川上流右岸地区，教育学部，埋蔵文化財調査室，理学部北，ポプラ並木東，工学部西側に至るサクシュコトニ川中流左岸地区，農学部北側地区，第一農場セロンベツ川中流右岸地区，遺跡保存庭園地区，新学生寄宿舎地区等の遺跡の広がりが，概ね確認できた．

表-1 構内遺物採集地点

	地点	遺構・遺物	第1図 座標
1	本部南	土師器・擦文土器・黒曜石	10-03周辺
2	図書館東	石刃	15-09
3	図書館南	土師器	13-11
4	文学部東	土師器	15-12
5	農学部北西	土師器	11-25周辺
6	農学部北西	土師器	11-29
7	情報処理教育センター北西	擦文土器	23-10
8	薬学部南西	擦文土器	28-13周辺
9	地球物理西・ポプラ並木東	土師器・擦文土器・後北式土器・北大式土器・黒曜石	22-28周辺
10	ポプラ並木北西	土師器	25-34
11	第一農場	土師器	22-38
12	演習林苗畑北	土師器・黒曜石	08-36周辺
13	第二農場南	土器片	93-52周辺
14	第二農場北西	土器片	103-60
15	第二農場北東	土器片	107-53

これまでに遺物の分布が認められなかった地区としては，セロンベツ川上流の演習林苗畑，第二農場南半の外国人宿舎周辺で，遺物の撒布が確認されたが，遺跡の広がり等は未だ明らかではない．

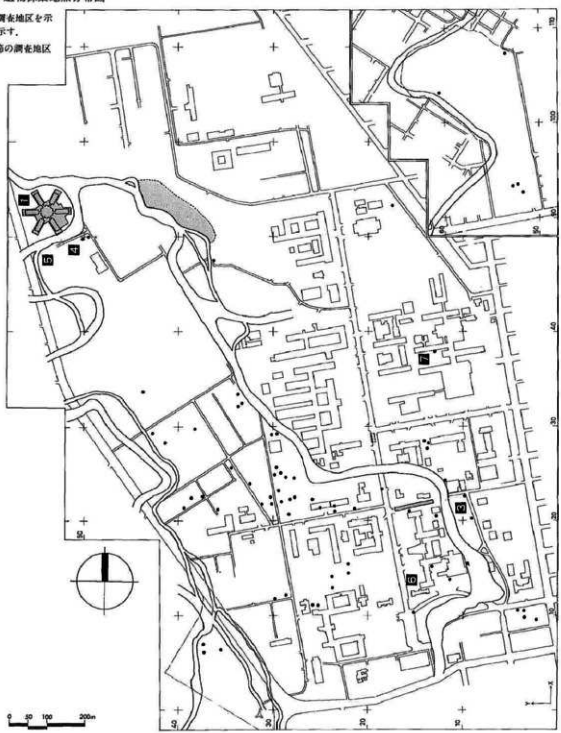
新発見の地点の多くは，学内を貫流する2つの小河川，サクシュコトニ川，セロンベツ川の両岸にそっており，これまでの調査結果を総合すると，両河川の流路と学内の遺跡分布が，強い関連を持っていることが，より明瞭になった。ただし，第1図に示したとおり，遺物は学内ほぼ全域にわたって発見されており，既報に比べても分布範囲は，さらに広がっている．

採集された遺物も，縄文時代から擦文時代に至る各時期のものを含んでおり，いくつかの遺跡に分離されるものであろうが，現段階では，構内全域を「北大遺跡群」として取り扱うのが妥当であろう．　（松岡達郎）

第1図　北大構内遺跡・遺物採集地点分布図

※図中，黒四角の番号は，調査地区を示し，●は遺物採集地点を示す．

※図中の番号は，第1章1節の調査地区に対応する．



第Ⅱ章　学生寄宿舎建設地区の調査

Ⅱ-1　調査の概要

《調査要項》

▶遺跡所在地／札幌市北区北17条西13丁目

▶調査主体／北海道大学

▶予備調査期間／昭和56年7月24日～昭和56年8月12日

▶本調査期間／昭和56年8月14日～昭和57年9月24日（約13ヵ月半）

▶発掘調査面積／5,904㎡

▶調査員／横山英介（調査担当者），松岡達郎

《調査までの経緯》

北大構内に古代の遺跡があることは，すでに，明治20年代に知られていた．当時札幌市内の古代遺跡をしらべていた高畑宜一の古代竪穴分布図に，旧恵迪寮西側の原生林に数多くの竪穴が窪地として残っている様子が示されている（羽賀　1975）．その場所が発掘調査等によって正式にしらべられたのは，昭和27年になってからである．北大北方文化研究室の活動の一環として窪地として残っている竪穴の分布図が作成され，その一部に対して発掘調査が行なわれている．その際，確認された竪穴の数は87基，発掘によって確められた竪穴住居は，形が隅丸方形で「且状の床」をもつもので，出土土器は，「土師器」の特徴をもつものであった（北大調査団　1955）．ここはその後，「北大遺跡」と呼ばれ現在に至っている．当地区は，昭和56年に，北大埋蔵文化財調査室によって，再度竪穴を含め周辺の地形測量図の作成が行なわれ，この遺跡と周囲の自然林を含め「遺跡保存庭園」として保存処置が計られ，一般に公開・活用されている（吉崎・岡田編　1983）．

昭和55年6月に発足した埋蔵文化財調査室は，構内におけるあらゆる土木工事に対して，事前にその地区の埋蔵文化財包蔵の有無・性格などを確認調査することを最初の任務とするものである．埋蔵文化財調査室が行なった構内における遺跡の分布および発掘調査の結果をみると，昭和57年10月までに28遺跡（地点）となっている（吉崎・岡田編　1983）．

昭和57年度の当初に，大学本部より示された学生寄宿舎の建設予定地は，上に述べた明治中頃の「高畑分布図」においても，また埋蔵文化財調査室による構内遺跡分布図においても示されていない地域である．したがって，遺跡確認のための予備調査が必要となったわけである．

（横山英介）

《遺跡の立地および概要》

北大構内には，コトニ川から分枝した2つの支流，サクシュコトニ川，セロンベツ川が流れており，遺跡はそのうちの西側を大きく蛇行しつつ北流するセロンベツ川の左岸にある．両支流は遺跡の北東付近で合流し西へ流れる。

遺跡の周辺は，標高約11mの低湿地で，この2つの支流に囲まれた舌状の微高地上に営まれた集落跡が本遺跡である。遺跡形成当時のセロンベツ川の河床面は，標高約9m，川幅は河床部で約11m，川底は砂であった．集落はこの流れと密接な関係を保ちつつ営まれたと考えられる．

（松岡達郎）

《予備調査》

当該地は軟式野球場跡地であったため，積土がほぼ全域に亘ってみられた．その除去に重機が使用された．まず，重機をF棟予定地に配し積土の除去を行ない原地表土を取り除いて精査したところ，土師器の破片が2点出土した．つづいて，A，B，C，G棟予定地において同様な作業を行なったところ，同じように土師器の破片が出土した。したがって，当該地は，擦文時代に営まれた遺跡であることが判明した．このため，プロジェクトチームから，大学及び各関係機関に，文化財保護法による正規の手続きをふまえた協議を行なう必要がある旨報告された．

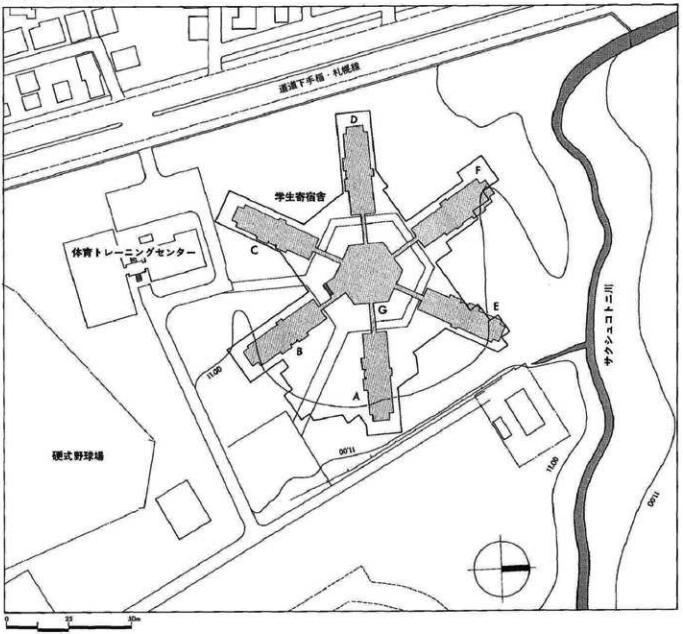
《本調査》

本調査を行なうに当って，建設予定地とその周辺，つまりA～G棟および各棟間をその対象とすることに決定した．

《グリッドの設定》

調査区域の最も東端をかすめる線(＝X軸)とそれに直交する最も南端を通る線(＝Y軸)を基線とする．X軸はB棟―G棟―F棟の中心軸を結ぶ線と平行関係にあるものである．原点(X＝0，Y＝0)は，調査区域の最も東南隅に設定してある．グリッドは原点からX，Y軸正方向へそれぞれ4mを一単位として設定された．

第2図　発掘区と周辺の図



《発掘調査の経過》

発掘調査は，昭和56年８月14日から行なった．終了は昭和57年９月25日である．

最初に予備調査の統行作業として積土の除去を行ない，延べ18日間を要し完了をみた(８月20日)．

つぎに人手による精査を引き続き行ない，その作業は，遺構の有無や遺物の分布範囲等の確認を目的とした（→９月23日）．その結果，遺構はＣ，Ｄ，Ｅ棟以外に色濃く分布し，遺物もほぼそれに見合う在り方を示していることが理解された．

遺構の発掘は，発掘作業員の人数を考え，竪穴２基分をほぼ同時に調査することにした(９月24日→12月２日)．その際，各竪穴の周辺に分布する遺物等も同様に記録におさめ，取り上げを併行して行なった．遺物の取り上げに際し個々の位置・レベルを記録し，必要に応じて写真撮影を行なった．

以上述べたように，昭和56年12月上旬までに竪穴２基とその周辺の調査を終了，降雪期をむかえた．

第３図　地形及び遺構配置図

降雪期に入るとテントを三棟設営し，発掘調査を続行した．テントは厚手の布張りで，大きさは4間×5間である．テント内では大型石油ストーブを一昼夜使用し，包含層の凍結防止等につとめた．また照明用には，螢光灯を用いた．テントは移動が比較的容易に出来るものを準備，発掘が終了すると次の地区へ移動を行なった．このようにして包含層に限定して調査を行ないし冬期間（昭和56年12月3日～昭和57年4月3日まで）に約1,390m²発掘し終えたことになる．

野外調査シーズンの到来とともに，旧河川内の杭列の調査が開始された（5月7日→6月23日）．この時期の本格的な漁撈施設は，日本最初のもので，多くの収穫を得るものであった．

並行して残りの3基の竪穴をはじめとする，多くの焚火跡，廃棄物堆積遺構，炭化物埋積土坑等の遺構や，遺物集中地点の調査を続行，9月9日をもってすべての調査を終了した．延べ約13ヶ月を要した．　（横山英介）

Ⅰ-2 調査の結果

発掘調査によって，竪穴住居5基，土坑6基，卵大礫の集積4個所，および多数の焚火跡，炭化物の分布域が確認できた．また，集落の南側でセロンベツ川を横断するように設けられた環状遺構が発見された．

出土した遺物は，土師器，擦文土器，須恵器，石器，鉄製品，土製品，木製品，などの人工遺物のほか魚歯骨，獣骨，植物種子等の自然遺物が多数得られており，現在整理・分析の作業が進められているところである．以下に遺構・遺物の代表的なものについてその概要を示す．

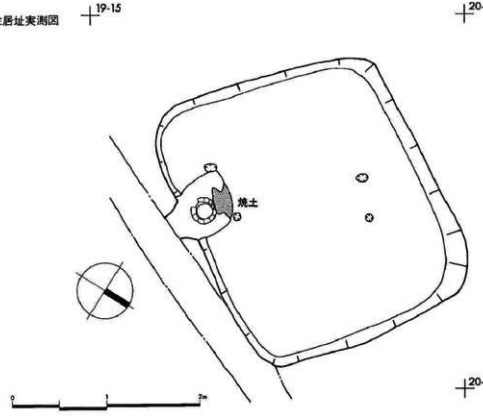
（横山英介）

(1) 遺構

1号住居址（第4図，第12図）

約3m×2.5mの方形に近い平面形を持つ．第2遺物包含層の黄色粘土層より，その下の黄色砂層に掘り込まれており，深さは55cmである．長軸は，ほぼ北西―南東

第4図　1号住居址実測図



で，南東長辺の中央よりやや偏った所にカマドを持つ．柱穴は確認できなかった．

カマドからは中型の甕が発見されたが，これはカマド両袖に塗り込めた土器片と，支脚の代用として用いられた倒立の小型甕によって造り付けの状態で設置されていた．煙道は掘り込みで作られていたが，一部はグランド造成時の排水溝による攪乱で破壊されており，煙道の長さは確認できなかった．

6号住居址（第5図，第13図）

約8m×7.2mのやや不整方形の平面形を持つ．黄色粘土層より，その下の黄色砂層に掘り込まれており，掘り込み面より床面までの深さは50cmである．長軸はほぼ北西一南東で，南東短辺の中央よりやや偏った所にカマドを持つ．煙道は掘り込みであるが，排水溝による攪乱で破壊されており，長さは確認できなかった．

柱穴は7個所である．その内の6本は，カマド，煙道，住居長軸を結ぶ線を対称軸として3本ずつ配されている．残る1本は床面北東隅寄りにあり，住居もこの方向にふくらんだような平面形を持っており，居住時の拡張の可能性がある．柱穴の深さは31cmから74cm，平均61cmであった．

本住居址は，火災により焼失したものであり，図に示すような炭化材の分布が確認できた．ただし，炭化物より下位の床面上，壁面きわに，わずかながら覆土が形成されており，居住中ではなく，住居放棄後，一定期間を経た後に火災にあったものと推定できる．また，向い合う2つの壁面にそって打ち込まれた竪杭が確認できた．

1号土坑（第6図，第14図）

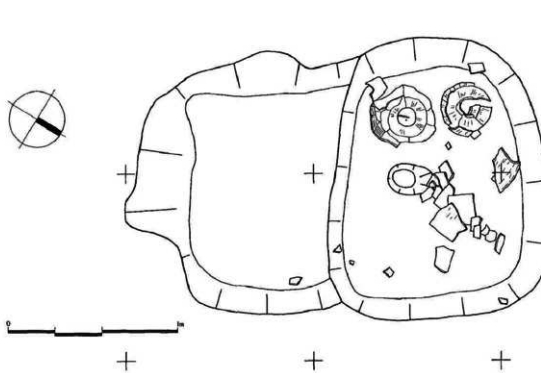
約1.5m×1.2mの一辺のややひろがった隅丸方型の平面を持つ．長軸は北東一南西である．黄色粘土層より，黄色砂層に掘り込まれており，掘り込み面より坑底面までの深さは35cmである．

坑底中央付近に深さ5cm程度の浅い皿状の落ち込みが確認できたが，それ以外顕著な内部構造はなかった．土坑内の埋土中には2層の焼土が見られ，上層の焼土以下は人為的な埋め土であった．

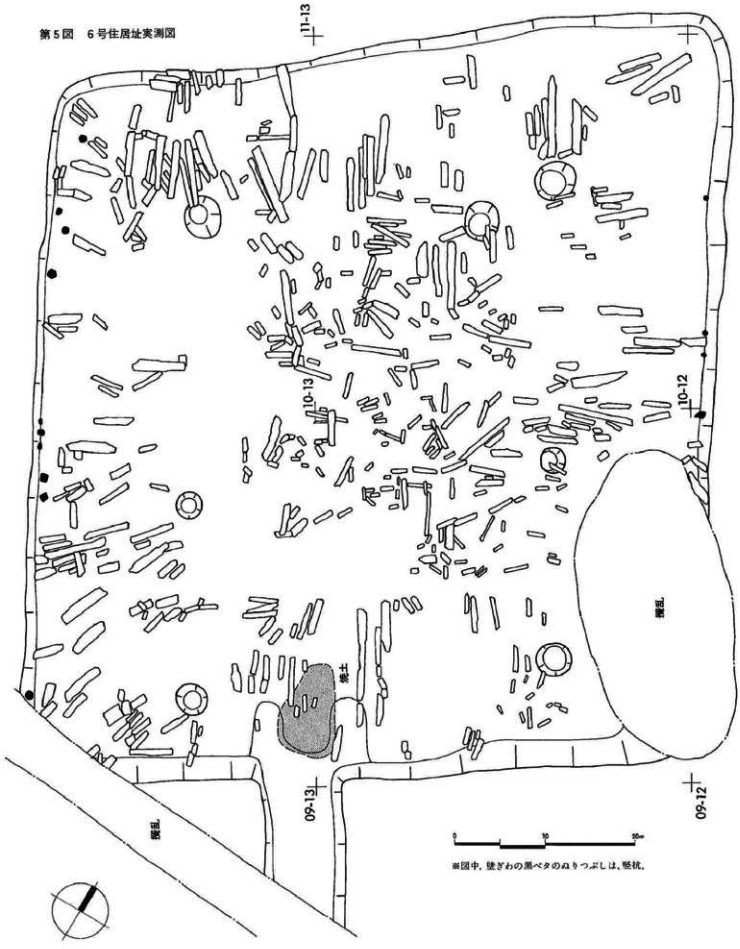
土坑内の南西側には，2個体の大型甕が倒立状態で置かれており，一方の個体は底部が欠失していた．また，坑底近くの埋め土中の焼土上面からは大型甕の破片が数かれたような状態で出土した．

土坑外の南東側は，土坑とほぼ同程度の広さで，浅く

第6図　1号土坑実測図



第5図　6号住居址実測図



皿状に落ち込んでいた．土坑および，この皿状落ち込みの上面には炭化材が見られ，そのまわりには，広い範囲にわたって焼土が分布していた．

上のことから，土坑の上には，木製の上部構造物が設けられていたもので，周囲での火の使用と共に焼けおちたものと推定する．

従って，本土坑は，掘り上げられた後，2個体の倒立甕を置いた後に埋め戻し，土器片を敷くように置いた後に火を使用して，さらに埋め戻し，木製上部構造物を設けた後，周辺での火の使用によってこれが焼け落ちたものと考えられ，墓である可能性が高い．ただし，骨・歯等は確認できなかった．

堰状遺構（第7図，第15図～第17図，第23図）

集落の南方に埋没した旧河川の川底より，木杭，小枝等を用いた堰状の構造物が発見され（以下では「テシ」と仮称する），左岸側の一部をのぞいて，ほぼ全体像を確認することができた．

テシは，集落をとりまくようにして流れるセロンベツ川に設けられ，その位置はサクシュコトニ川との合流点より約160m上流にある．テシの発見された所では，川幅は河床部で約8.5m，肩の部分で約12mである．

流路に対してテシは，やや斜交して設けられており，全長は約12mである．テシの平面形は，河道の中央付近で屈曲し，上流側に頂点を持つ「への字」状であり，ウィング状の2つの杭列のなす角度は約160度である．

テシは，残存部長さ1m前後の木杭を，川底に対してほぼ垂直に打ち込んで杭列を作り，これに対して，太さ5～10cm程度の角材，丸材，及び太さ1～2cm程度の小枝をからめるように差し渡して造られていた．木杭の大半は割り材で，随所に切り込みが見られるものがあり，廃材を利用したものと思われる．

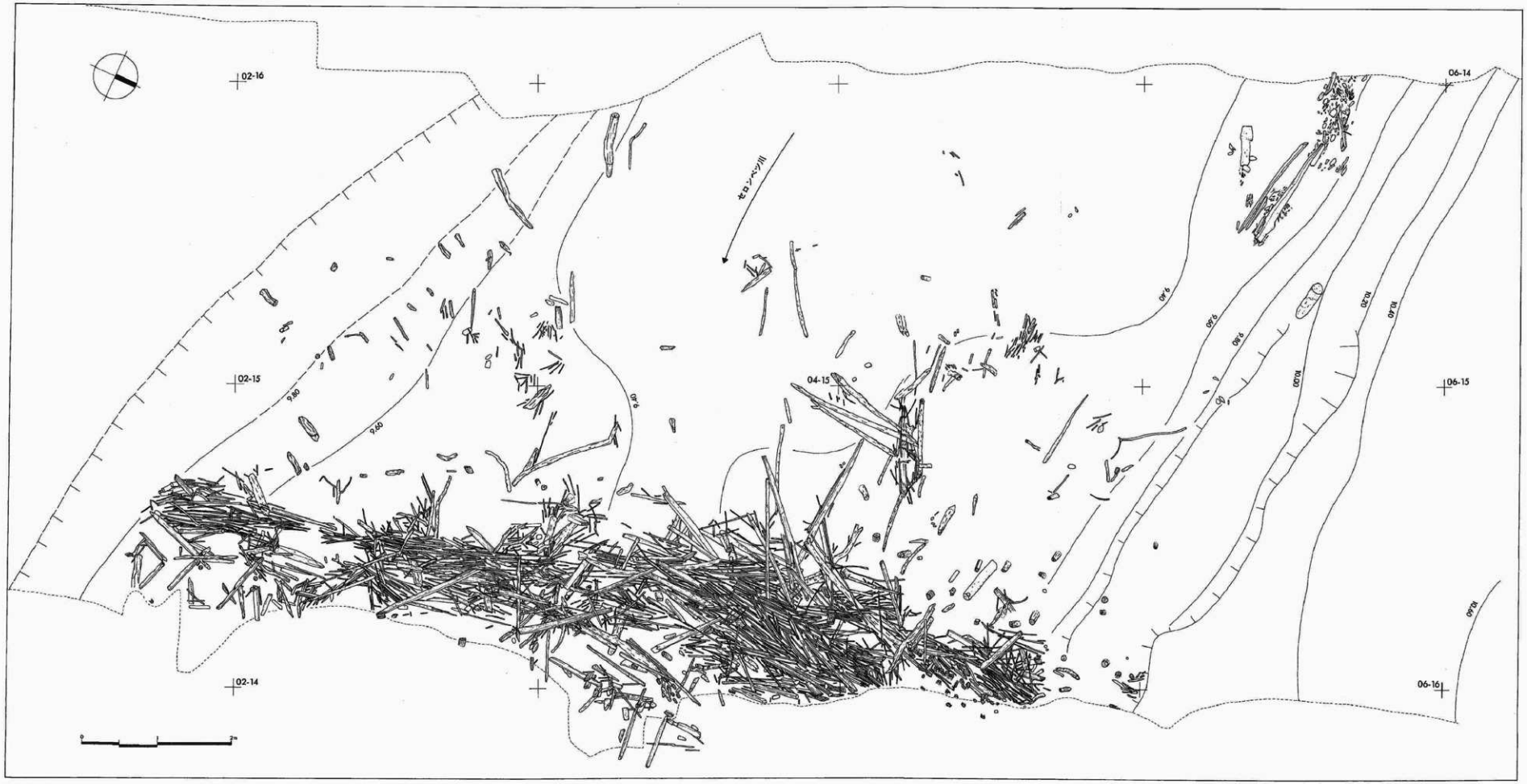
左岸側には，数列の杭列の並びが見られ，その上流側に，直径約3mで環状に丸太杭が打ち込まれていた．また，最も左岸寄りの部分には，杭同士が接するように密に打ち込まれた部分があった．

堰の中央部，頂点に相当する部分は横に差し渡した材，小枝が少なく，かつその部分の河床が深く窪んでいることから，開口部であったと考えられる．また開口部と考えられる部分から上流に向けて，2列の杭列が長さ3.5mにわたって，間隔1.3mで並んでおり，何らかの構造が設けられていたものと思われる．テシより上流側の両岸には，岸にそって丸太杭が打ち込まれており，川岸の土止めであったと考えられる．

テシから見ると，集落は北にあり，テシのすぐ北の川岸で，多くの焼土跡が発見された．焼土中からはサケ科を中心とする多量の魚歯骨片が発見された．また川底や，テシを構成する部材にはさまって，多くのヤス，中柄状の尖頭具，マレップ片と思われる鉄器が発見された．これ等のことから，この施設は，遡上期のサケを中心に，上流に向って遡る魚群を遮断し，中央開口部およびその上流に設けられた何らかの構造物に誘導，捕獲するエリ漁具の一種であったと考える．

ただし，堰の構造を利用して，下流に降る魚群を捕獲する，ヤナ漁具として用いられた可能性もあり，魚の遡上・降海を遮断する堰であったという意味で，テシと仮称することにとどめる．（松岡達郎）

第7図　環状遺構(チシ)実測図



(2) 遺物

ここに示す遺物は，1号住居址，6号住居址出土のものを中心とした，特徴的なものの一部である．

1）人工遺物

《土器》

▶a　ロクロ使用の土師器坏

第18図：「ヘラ書き」の坏．出土地区／17—11グリッド．層位／炭化物層．器形・調整／埦形，回転糸切り底，内面ヘラミガキ→黒色処理．「文字」は器外面の口縁下にありヘラで「夾」と描いてある．器高69㎜・口径158㎜・底径70㎜．

第19図-5：出土地区　20-15，20-17，21-17グリッド．層位／Ⅳ層．器形・調整／埦形，回転糸切り底，内面ヘラミガキ→黒色処理．器高63㎜・口径147㎜・底形62㎜．

第19図-6：出土地区／17-16，18-15，19-15グリッド．層位／2号竪穴の覆土．器形・調整／埦形，回転糸切り底，内面ヘラミガキ，特に底部は放射状のヘラミガキ→黒色処理．器高71㎜・口径162㎜・底径67㎜．

▶b　土師器坏

第19図-7：出土地区／10—08グリッド．層位／Ⅳ層．器形・調整／器外面の口唇部直下に横走沈線をもつ埦形の坏．器外面はハケ目とヘラミガキ調整．内面はヘラミガキ→黒色処理．器高68㎜・口径170㎜・底径58㎜．

▶c　土師器鉢

第19図-1：出土地区／17—11，18—11グリッド．層位／炭化物層．器形・調整／底が外側へ張り出す小形の鉢である．器面は内外面ともにヘラミガキ調整が施され，内面は後に黒色処理されている．器高53㎜・口径115㎜・底径56㎜．

第19図-2：出土地区／7号竪穴の壁溝．器形・調整／底が厚い小形の鉢である．器面外側はハケ目→ヘラミガキ，内側はヘラミガキ→黒色処理を施す．器高58㎜・口径113㎜・底径58㎜．

第19図-4：出土位置／6号竪穴の覆土．器形・調整／口縁部が外反する小形の深鉢である．器面の外面は口縁部がヨコナデ，体部がハケ目→ヘラミガキ調整，内面はハケ目→ヘラミガキ調整で後に黒色処理を施す．器高82㎜・口径143㎜・底径50㎜．

▶d　甕

第20図-1：出土地区／1号竪穴のカマドの支脚として使用(第12図-5)．器形・調整／頸部と胴部の境界が不明瞭な広口の小形土師器甕である．器面外側は口縁部から頸部にかけてハケ目→ヨコナデ，胴部がケズリ，ハケ目調整後部分的にヘラミガキ調整が施される．内側は口唇部から頸部中程にかけヨコナデ，胴部上半までハケ目調整，以下ミガキが施されている．底は外側が木葉圧痕，内側がハケ目とヘラミガキである．器高126㎜・口径150㎜・底径78㎜．

第20図-2：出土地区／1号竪穴のカマド焚口に固定(第12図-2・3・4)．器形・器面調整／頸部と胴部は段によって区分される．頸部が大きく外折する長胴の土師器甕である．頸部外面は複数の横走沈線文で充塡されている．口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデ調整，胴部はハケ目調整で外面が縦方向，内面が横方向を示す．器高256㎜・口径230㎜・底径80㎜．

第20図-3：出土地区／6号住居址の覆土．器形・器面調整／頸部が大きく外反する広口の小形線文土器甕である．口唇部外側には刻み目文，頸部には複数の横走沈線文を施文する．器面外側の胴部は縦位・斜位のハケ目，内側はナデ調整される．器高130㎜・口径141㎜・底径52㎜．

▶e　須恵器坏

第19図-7：出土地区／04—08，05—07グリッド．層位／Ⅴ層上面．調整等／回転糸切り底，再調整はない．灰

白色を呈す．器高48㎜・口径147㎜・底径49㎜．

第19図-8：出土地区／16—17，17—11，18—10，18—11グリッド．層位／炭化物層．調整等／回転糸切り底，再調整はない．器面外側に「‖」状窯印．暗灰色を呈する．器高58㎜・口径146㎜・底径63㎜．

《土製品》

▶a　支脚

第20図-4：出土地区／7号竪穴の覆土．器形・調整／円筒形．一方は封をし平坦な上底部を形成，脚部には一対の透かしを設けている．幅約15～18㎜の粘土紐の積み上げにより成形，内外面ともハケ目調整が施されているが粘土紐間の接合部は明瞭に識別できる．器高119㎜・上底面径99㎜・脚径108㎜．

▶b　紡錘車

第19図-9：出土地区／図版に示した紡錘車は2号竪穴床面をはじめ遺構に伴なったものばかりである．形状・調整等／円盤状．一面は平坦，他面は周縁部より2～3㎜低くなる．全面に亘りヘラミガキ調整が施されるもの（右上）もみられる．ほぼ中央部に焼成前に穿孔．左下のもので最大径64.4㎜・最大厚23.6㎜・重量110ｇ．

▶c　小玉

第22図-4の中央：出土地区／大半は18—11グリッドを中心とする炭化物層より出土している．形状等／丸玉.中央部に焼成前に穿孔．仕上げにはミガキが施される．左下で最大径14㎜・厚さ13㎜．

以上のほかに，おもり（第20図-4右下），糸巻羽口等が出土している．

《石器・石製品》

現在まで判明している石器は，石鏃・スクレイパー（第22図-2上段）・磨製石斧（第22図-3中央及び右）・敲石・石錘および石核（第22図-1上段）・剥片（第22図-1中・下段）である．剥片には大部分のものに使用によると思われるリタッチがみられる．石材の大半は黒耀石であるが，頁岩，安山岩，緑泥岩等もわずかにみられる．そのほか陽物状石製品（第22図-3左）や抉り込みのみられる礫（第22図-4左）等が出土している．

《金属製品等》

現在まで判明している金属製品は，環，刃物の一部等である．

また，鉄滓が比較的まとまって出土しており，今後多方面に亘る分析結果が期待される．

《木製品等》

現在まで判明している木製品類は，角杭・丸杭（第21図-8）・横材・切断されたヤナギの小枝類・魚具（第21図-1）・木槌（第21図-2・3）・錘（第21図-4）・木偶？（第21図-5）・抉り込みのある木器（第21図-6）・小型板（第21図-7）・曲物の一部等である．これらはテシに伴うもので旧河川底の砂層などから出土したものである．槌錘は，ヤチダモ・イチイ・ノリウツギ・カエデ・トドマツ（アカトドマツ）・アカエゾマツ・ハルニレ・ヤナギ類・ハリギリ・シラカバ・ウダイカバ・オニグルミ・ミズナラ・カシワ・イヌエンジュ・ハンノキがある．

なかでもヤチダモが大半を占める．

そのほか焼けた竪穴住居址から炭化材が出土している．

2）自然遺物（第24図）

ここに述べる自然遺物とは，動植物の遺存体を指すものである．特に植物種子のなかには栽培種が大量にみられ，これらと別項で扱わなければならないのは当然であるが，今回は自然遺物の項で取りあつかい，動物遺存体同定結果と合わせて本報告で調整を計りたい．

まず，以下に示す動植物の遺存体は，主に遺構から採取した土壌を浮遊選別及び水洗いすることによって得られたものである．その結果，これらの遺存体は竪穴住居址からはほとんど出土しておらず，むしろ焼土遺構や廃棄物集積遺構に多く含まれているという傾向がみられた．

以下現在までに判明したものを示す．※

▶動物――シロサケ・ヤチウグイ・キウリウオ・フナの歯骨，鳥獣骨片少量であり，シロサケの歯骨が大部分を占めるようである．

▶植物――コメ・オオムギ・コムギ・緑豆・モロコシ・アワ・ヒエ(属)・ウリ(科)？・ホオヅキ(属)？・ヤマブドウ・タデ（科）

そのほかテシが検出された旧河川からは，先に示した木製品と同種の流木のほかにカツラ・ホオノキ・シナノキ・オオバボダイジュ・ミズキ等が出土した．

（横山英介）

Ⅱ-3 小括

この遺跡から発掘された遺構・遺物等について，現在整理・分析の途上にあるので，結論はもちろん提示できない．ここでは現時点までに判明した諸点を示し小括としたい．

①発掘調査は約13カ月半を要し，建設予定地区とその周辺5,904m²を調査し終えた．

②発掘調査によって擦文時代の竪穴住居址５基，土坑６基（うち墓２基が含まれる)、卵大礫の集積４基および多数の焼土・炭化物の分布域，そして埋没河川から堰状遺構―テシ１基がみつかっている．

③これらの遺構のうちこの年報では，大・小形の竪穴住居址を各々１基，土坑墓１基，そしてテシの概略を記してある．

④遺物については，土師器坏，土師器および擦文土器の甕，須恵器坏，土製支脚，紡錘車，土製玉，石器等，竪穴住居址やその周辺から出土したもの，木製品類，木杭等テシ遺構に関係する遺物，あるいはコメ，オオムギ，モロコシ，アワ等栽培植物の種子類を示した．これらはいずれもほんの一部分でありしかも詳細な分析結果を示したものではない．

⑤遺物を含めた遺跡の構造的分析は今後の課題である．例えば遺跡については，住居と空地の利用，漁場との関係等，遺物では土器のセット論，鉄器と石器における生産用具の問題，栽培植物からみた農耕の在り方等々、従来知られていた擦文時代のイメージをかなりの部分で修正・変更しなければならない問題を提起できるものと考えている．

（横山英介）

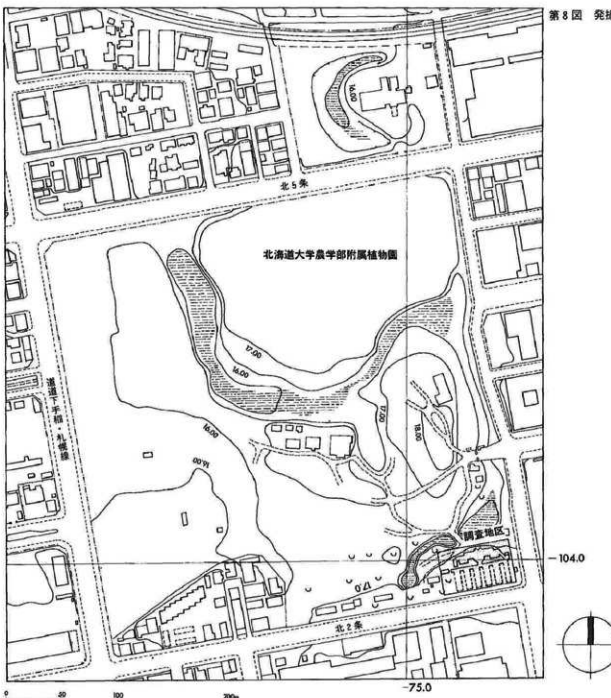
※同定者は以下による：貝類は平川恭彦氏，種子は山田悟郎／ゲーリー・クロフォード氏，動物は西本豊弘氏．

第Ⅲ章　農学部附属植物園地区の調査

Ⅱ-1　調査の概要

農学部附属植物園(札幌市中央区北３条西８丁目)の南東隅，温室周辺の地区において，遺跡の分布調査及び発掘調査を行なった．同植物園は，古くから遺跡として知られており，本調査は，同植物園の温室建て替え工事に伴って実施されたものである．

植物園内は自然環境の保存がよく，現在沼・湿地となっている旧河川の河道を明瞭に観察できる．調査地区は



第８図　発掘区と周辺の図

ピシクシメムと呼ばれた湧水点の南側微高地に位置しており，標高は約17mである．湧水点は現在，池となって残っており，これを源とした旧河川は蛇行しつつ北流し，北大構内西側を流れていたセロンベツ川につながっていたものと推定されている．（第8図）

▶調査面積　2,990㎡

▶調査期間　遺跡確認調査／昭和57年4月12日から
昭和57年5月11日まで
発掘調査　／昭和57年5月20日から
昭和57年6月14日まで

▶調査方法：旧温室を取り壊した後，基礎等を重機によって排除し，自然地層が残っていた部分について，人力によって精査，遺跡の確認を行なった．その結果，擦文時代に属する遺物，遺構が発見されたので，調査地区全域に4m×4mグリッドを設定，発掘調査を実施した（第9図）．

Ⅲ-2 調査の結果

発掘調査によって，竪穴1基が発見された他，若干の土器片等の遺物が得られた．

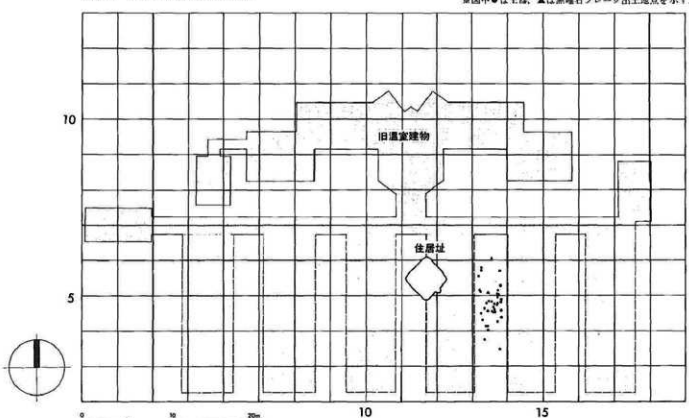
(1) 住居址及び住居址出土遺物（第10図，第25図）

3.9m×4mのほぼ方形の平面形を持つ．深さは約50cm．カマドは南東辺ほぼ中央に位置する．壁道はくり抜きで作られており，壁面からの長さは55cmであった．深さ5cm程度の小さなピットが床面の4隅とその他1個所で発見された．4隅のものは柱跡であろうが，明瞭な掘り込みにはなっていなかった．

覆土の中層には，灰白色微粒の火山灰（Ta-aと考えられる）が薄く皿状に溜っていた（第25図の2層）．

第9図　グリッド及び遺構配置図

※図中●は土器，▲は黒曜石フレーク出土地点を示す．



遺物としては，上記火山灰の直下から土器片１点，カマド内と覆土中から打痕のある礫が出土した．床面からは礫１点が出土したのみである．

(2) 包含層出土の遺物(第25図)

遺構外より，土器片17点，黒曜石フレーク４点，礫７点が出土した．出土土器片の１部を第25図に示す．遺物は住居址より東へ約８ｍの点を中心に，南北８ｍ東西４ｍの範囲に集中して発見されたが，遺構との関係は不明である．

Ⅲ-3 小括

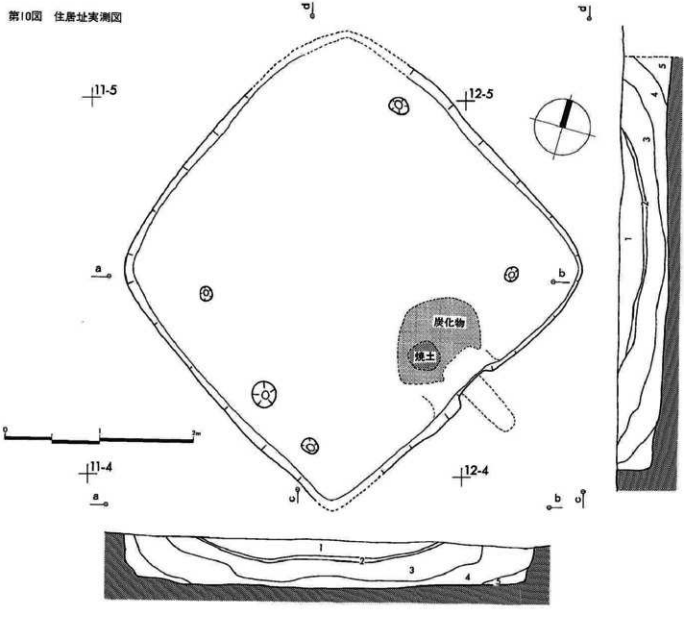
今回の調査で出土した土器片は，すべて撚文時代に属するもので，竪穴住居址も同じ時期のものである．

調査地区は，セロンベツ川最上流部の湧水点南側の小台地状の微高地に位置しているが，この微高地は，本調査地区にわずかに残っているのみで，周囲は市街化しており，遺跡の広がり等は全く不明である．

なお，植物園内には，各所に河畔の微高地地形が残されており，北大構内遺跡群の調査結果等を考慮すると，このような場所に遺跡が残されている可能性は高いと考えられる．

（工藤義術・松岡達郎）

第10図　住居址実測図



まとめ

昭和57年度に，北海道大学構内で実施された埋蔵文化財関係の事業は，発掘調査２，予備調査５，工事中立会12の合計19個所であった．個々の作業の詳細は，第Ⅰ章で述べてある．

これらの調査個所は，すべて大学構内における施設整備，設備改善ならびに環境整備などの工事にともなって実施されたものである．年来の懸案にしたがって，本年度からは大学構内で行われる全ての土木工事に先立って，埋蔵文化財に対する何等かの対策がなされたことを喜びたい．

また，本年度の大学構内の埋蔵文化財に対する調査体制は，56年度報告『北大構内の遺跡〔２〕』のなかで紹介してある組織と方針によって実施された．つまり，全ての工事に先立つ，埋蔵文化財の有無の確認，保存対策，調査計画等については「北海道大学埋蔵文化財プロジェクト・チーム」（吉崎昌一助教授，岡田宏明教授，岡田淳子助教授，林謙作助教授，菊池俊彦助教授によって構成）が協議し，各種調査活動は横山英介を中心とする北大埋蔵文化財調査室のメンバーが主体となって実施した．この様な活動が円滑に行われたのは，学内において埋蔵文化財についての理解が深まったこと，および本学事務局の指示で各部局，機関相互の連絡体制がととのったこと，さらに，構内の遺跡分布に関する情報が蓄積されてきたことなどによる．

また，本年から，岡田宏明教授に対して北海道大学将来計画委員会委員としての正式の発令がなされた．このことは，埋蔵文化財保護に関して，寄与するところ極めて大であると思われる．

今年度発掘された学生寄宿舎建設地区は，前年度からの継続事業で，57年９月９日に野外作業が無事終了した．この調査は，発掘調査だけで13ヵ月半を要し，しかも冬期間もテントを張って作業を継続する，といった困難をきわめたものとなった．しかし，その結果，土師器を使用していた擦文時代の集落と埋没河川のなかから，魚止めの堰が発見され，詳細な調査を経て，ほぼその全容の把握に成功した．調査終了以降室内での整理作業が鋭意進められているが，ヘラ書きの文字のある土器，炭化したコメ，オオムギ，大量のサケの歯骨など，これまでの研究が大幅に書換えられるような学術的にも重要な資料が得られた．

その概要は，第Ⅱ章に記されている．これらの資料の重要性にかんがみ，この地点については，昭和59年度中に，正式報告を刊行することが決定されている．

第Ⅲ章の農学部植物園における発掘調査は，既設建造物の取壊し跡という悪条件の地域で行われたが，それでも竪穴住居が検出できた．同植物園内は，かつての自然地形が良く残っており，数個所に竪穴住居の痕跡を地表から認めることが可能である．河川痕跡に沿ったそれらの分布状態は，本学構内の遺跡分布調査の知見と一致するものである．　（吉崎昌一・岡田淳子）

《文献》〔アルファベット順〕

▶羽賀憲二／1975　札幌市琴似川流域にあった竪穴住居址群-明治中頃に作られた竪穴分布図について-　北海道考古学　第11輯　91～97頁

▶北大調査団／1955　北大遺跡について　北方文化研究報告　10輯　1～26頁

▶吉崎昌一・岡田淳子編／1981　北大構内の遺跡〔1〕北海道大学

▶吉崎昌一・岡田淳子編／1983　北大構内の遺跡〔2〕北海道大学

学生寄宿舎建設地区関係の写真図版

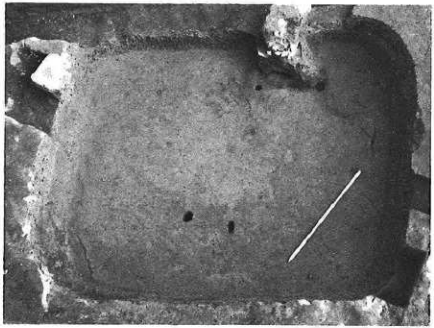
第11図　遺跡の近景

1（西側からみる）

2（東側からみる）

3（南側からみる）

第12図　1号住居址



1 全景(北側からみる)

2 カマドに固定された甕(正面から)

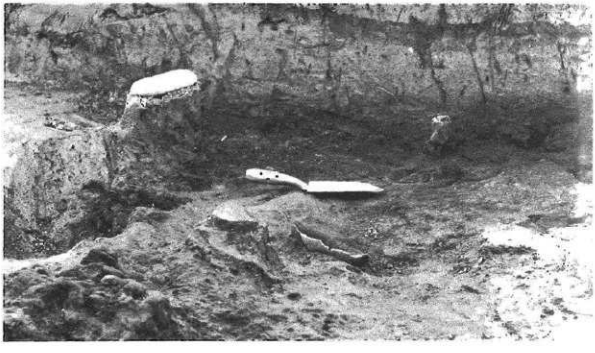
3 カマドに固定された甕(左袖側から)

4 カマドに固定された甕(左袖側から)

5 支脚に使用された小甕(正面から)

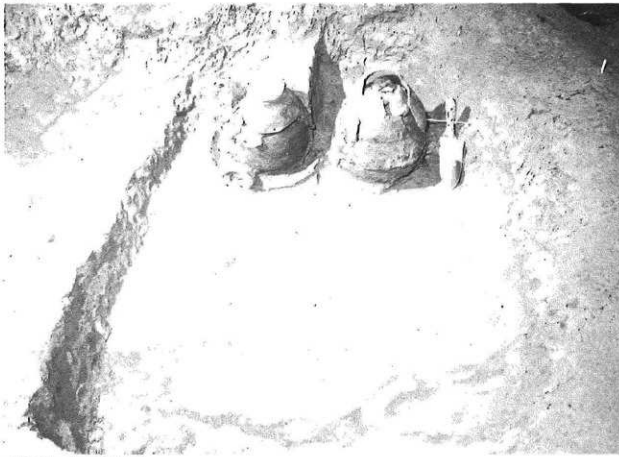
第13図　6号住居址

1 全景(北側から)



2 炭化材と土層堆積

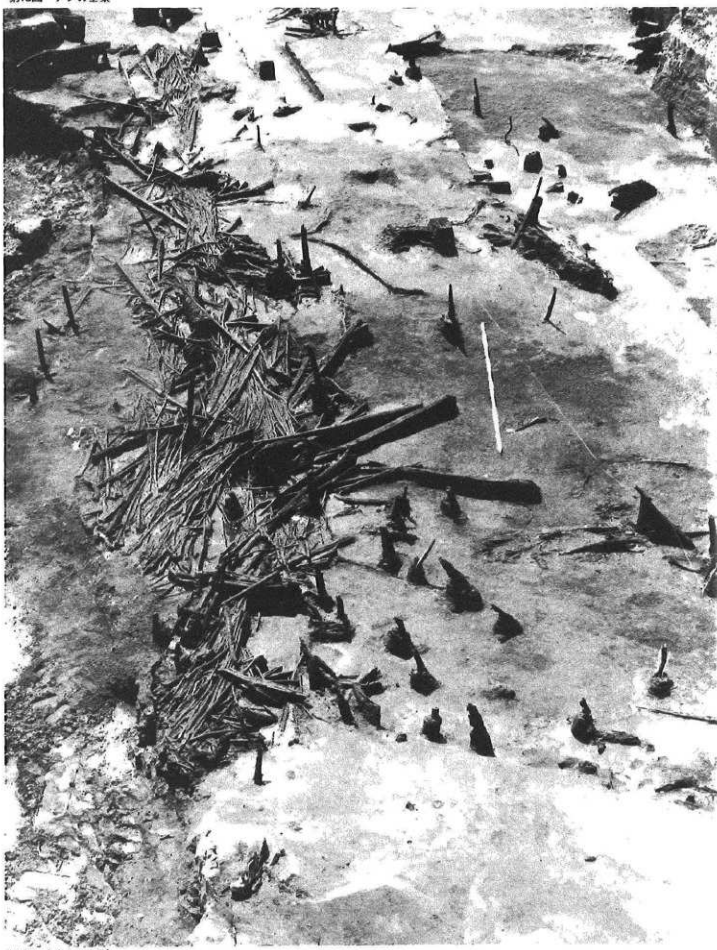
第14図　1号土坑



1 埋納された大甕(東側から)

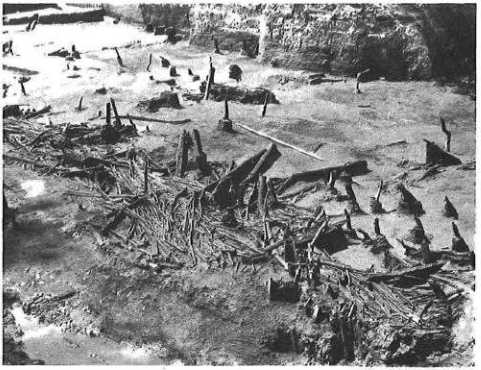
2 埋め土と甕の出土状況(南西側から)

第15図　テシの全景

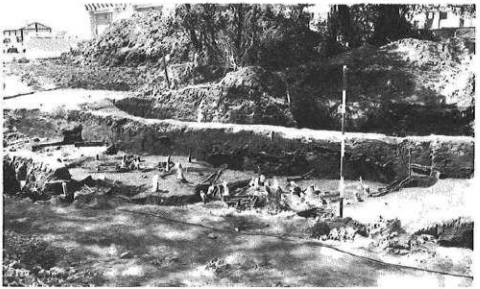


（北側―左岸からみる）

第16図　テシの部分(1)



1 左岸から下流をみる

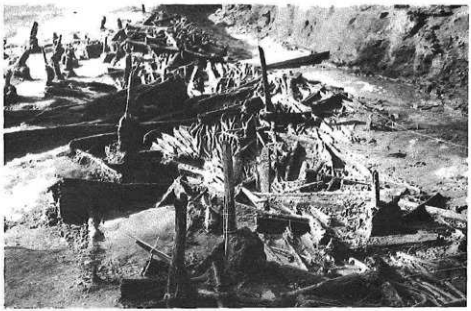


2 旧河川の埋没状況(下流から)

3 発掘状況(左岸側から)

4 発掘状況

第17図　テシの部分(2)



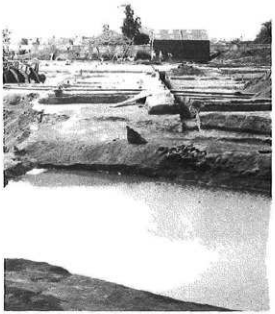
1 中央部より左岸側をみる

2 左岸上流側よりみる

3 川底出土の坏の破片

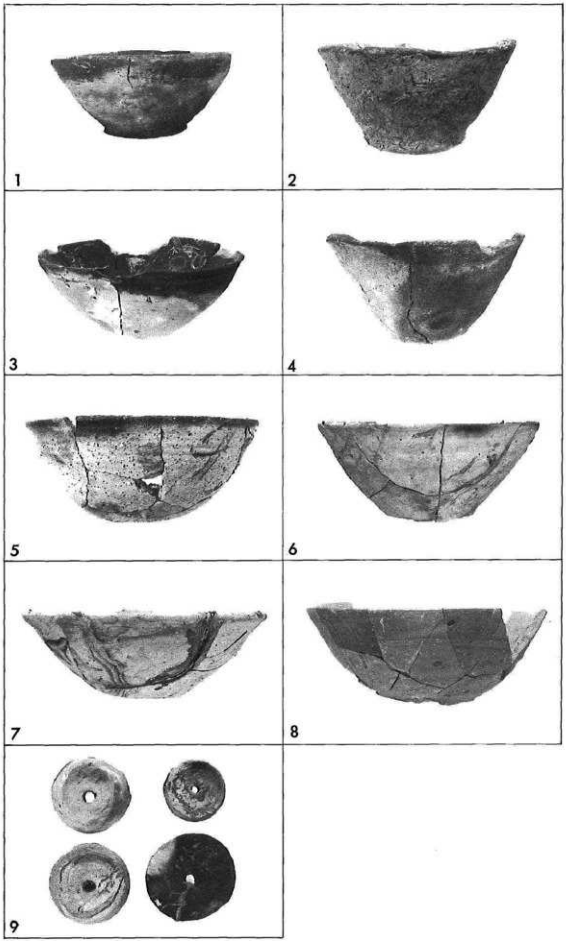
4 テシに使用されたヤナギなど(先端が削られているのに注意)

5 水をたたえた旧河川

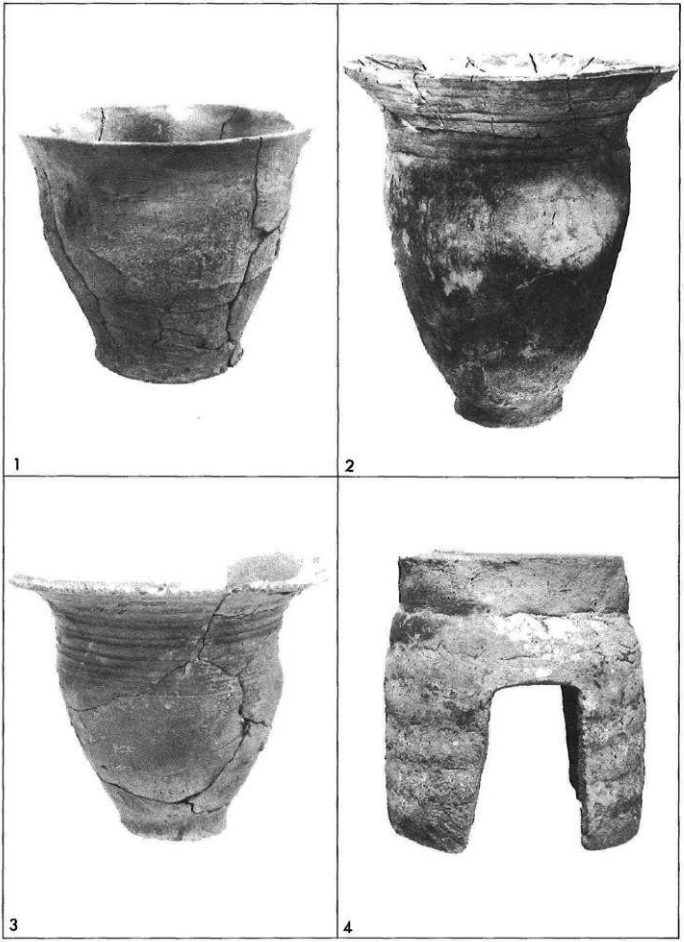


第18図　線刻文字のある土器片

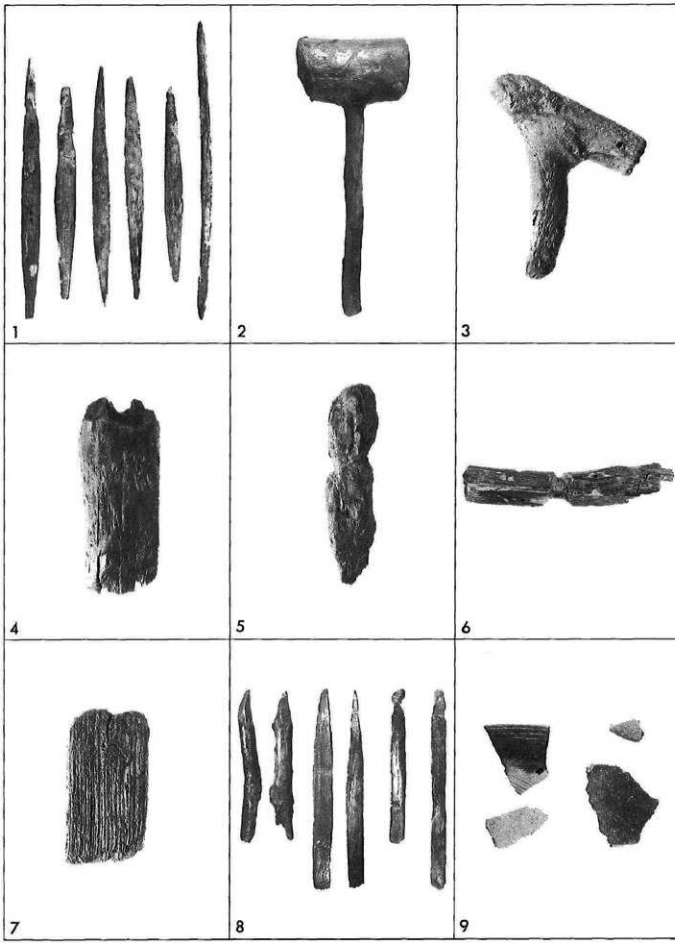
第19図　出土土器と紡錘車



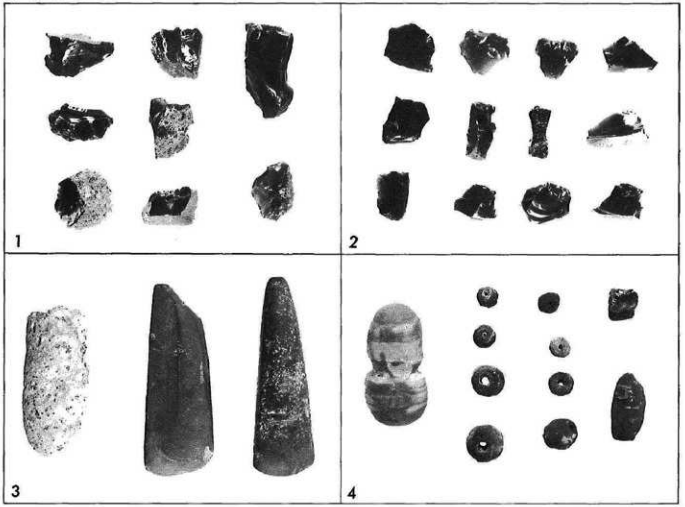
第20図　出土土器と土製支脚



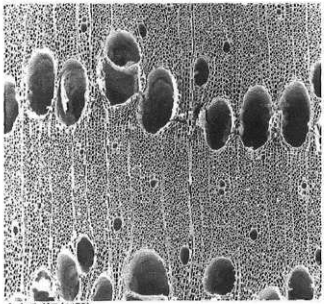
第21図　テシ出土の遺物



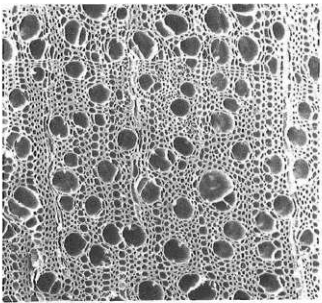
第22図　出土石器及び玉類



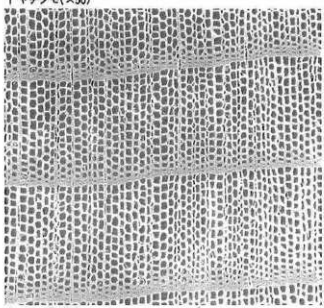
第23図　テシ出土木材の電子顕微鏡写真



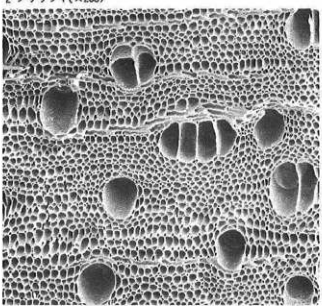
1 ヤチダモ(×50)



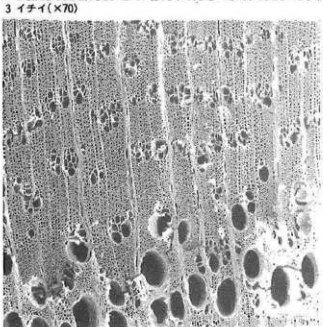
2 ノリウツギ(×200)



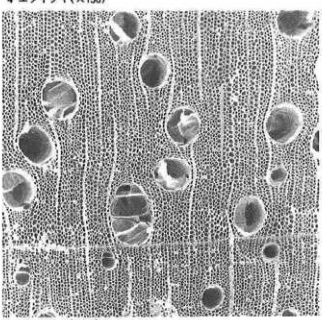
3 イチイ(×70)



4 エゾイタヤ(×150)



5 ハルニレ(×70)

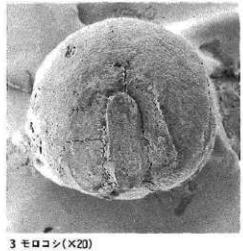


6 オニグルミ(×50)

第24図　炭化種子

1 コメ

2 オオムギ(×20)

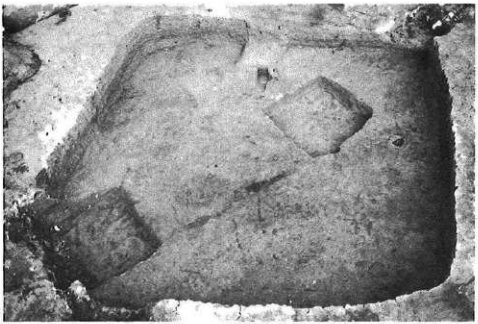


3 モロコシ(×20)

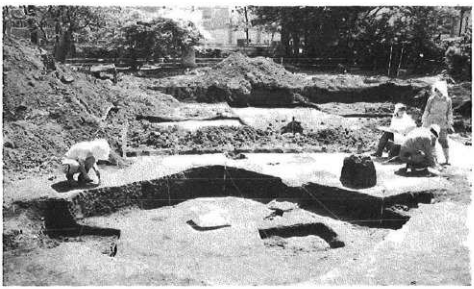
4 アワ(×20)

農学部附属植物園施設(温室)建設地区関係の写真図版

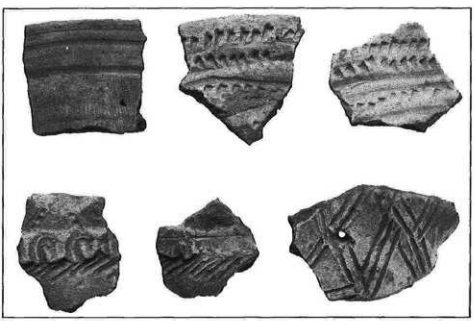
第25図　発掘状況・住居址・出土遺物



1 住居址の全景(北側からみる)



2 住居址の調査



3 出土した撚文土器

北大構内の遺跡

3

昭和57年度

昭和59年3月20日発行

発行所　北海道大学
札幌市北区北8条西5丁目

編集者　吉崎昌一＋岡田淳子

デザイン　桜井雅彦

印刷所　(株)北海道機関紙印刷所
札幌市北区北6条西7丁目

北大附近の赤外線カラー写真

北海道大学